



【官能短編小説】

# 閉ざされた金魚鉢







重い扉を開けると、まずカビ臭さが鼻をついた。

室内の澱んだ空気がもんわりと這い出てくる。

入り口から差し込む一条の光に、舞い上がる埃が薄闇の中でキラキラと輝いた。

まるでダイヤモンドダストみたいだわ。

憧れの広い背中影にいたさやかは、そんな場違いなことを思った。  
その頼れる同級生は、臭いや埃をものともせず、いままで封印されていた部屋に入っていく。

さやかも慌てて後を追った。

踏み入れた部屋はびつしりと音響機器に占領されていた。

壁のひとつを巨大なガラス窓が占め、その向こうにもうひとつ、部屋があるのが見てとれる。

さやかはフリルのついた花柄のハンカチで鼻を押さえながら訊いた。

「本当にここって、使えるの？」

前にいる長身の部活仲間は、蜘蛛の巣を払うように手を振ると、やっ  
とこっちを振り向いてくれた。

「ああ、ちょっと古いけど、機材はいいものを置いてる。好きに使って  
くれるんだって」

「ふーん。優しいのね、佐伯くんのお知り合いって。ありがたいわ」

「うん。それに、なによりも……」

佐伯雄太という名の部活仲間は、とろけるような笑顔を向けてきた。

「ここなら、他のうるさい連中に邪魔されずに練習できるよ」

さやかはドキンとした。

この甘いマスク。女子部員の間でいつも噂になっている、アイドル級のイケメン。

彼と二人きりになれるんなら、この不気味な薄暗い音楽スタジオも、秘密の隠れ家にさえ思えてくる。

女子放送部員きつての美少女、夏川さやかは、自分のときめきを悟られないようににつこりと笑った。

年末に開かれる全国学校放送コンクールに向け、二人が所属するK学院放送部も、日々練習を重ねていた。

その中であつて、さやかはいつも不機嫌そうに、眉にしわを寄せていた。

学校にある放送室を使用する時間は限られていて、しかもマイクは一本しかない。

ただでさえアナウンス担当の部員は女子だけでも5名いて、制作担当の部員よりずっと多いのだ。

これでは、自分にマイクが回ってくる順番を待つだけで日が暮れてしまう。

かといって、台本の素読みだけでは感覚がつかめない。

さやかは、自分が女子部員の中で群を抜いていると思っていた。

アナウンスの技術もそうだが、何より自分には華がある。将来は有名テレビ局への入社だって狙っている。

他のビジュアル的に難がある女子たちのような身の程知らずじゃない。私は女子アナになるんだ。

なんとしても彼女たちに負けるわけにはいかない。今度のコンクールで上位入賞すれば、将来大いに役立つ。

そう思っているとき、同じ二年生の制作部門の男子、佐伯雄太がこっそり声を掛けてきたのだ。



（これは内緒なんだけど、俺の知り合いで、昔、自宅に音楽スタジオを作った人がいる。もうミュージシャンは辞めたらしいけど、そのスタジオはまだあるんだ。「アナウンスの練習にも使えるから、よかったら貸してやるぞ」って言われてるんだけど、行ってみる？）

さやかはすぐに頷こうとして、ちよつと迷う素振りをした。

こんなときすぐに飛びつくのはちよつとはしたない。それは十八年間女をやってきて分かってる。

どうしようかな、ときやかは気を持たせた。主導権はこっちが握らないと。

さんざん迷ったふりをした挙句、さやかは頷いた。

そして今回バスを何度も乗り継いで、このえらく田舎にあるスタジオまでやってきたという訳だ。

やつと辿りついたそこは、寂しげな郊外にぽつんと建つ、灰色のコンクリート二階建てだった。この陰気なビルの奥に、備え付けの音楽スタジオがあるという。完全防音、遮蔽性抜群。

CD三枚で音楽業界から消えたミュージシャンが、羽振りの良かった頃に作った、個人の道楽だそうだ。

この建物に、普段人は住んでいないという。

鍵を預かっているからと、佐伯は勝手に門扉を開け、玄関を押して異空間へ入っていく。

その背中を、さやかは不思議な面持ちで見つめていた。

なんだか、人が殺されるドラマのオープニングみたいだわ。

ほんのちよっぴりの恐怖と、それに倍する甘酸っぱいときめきが胸を打つ。

ひよっとしたら彼、他に誰もいないこの場所で、私に触れようとするかもしれない。

それならそれでいいわ。

普段から、このイケメンの同級生の横顔をチラチラ盗み見ていたさやかは、そつと足音を殺して後に続いた。

そうして重い扉を開き、この無人の音楽スタジオに二人はやってきたのだった。

手探りで佐伯が電気を点ける。

パツと世界が明るくなり、ぼんやりと輪郭だけを浮かび上がらせていたスタジオの全貌が明らかになった。

予想していたよりも遥かに豪華な設備だった。

壁一面を占拠したガラス窓の下に、これまた左右いっばいにまでコンソールの卓がはめ込まれている。

ずらりと並んだスイッチは、透明な仕切りの向こうで発せられる音をひとつ漏らさず録音し、加工するだろう。

中央にでんと据えられたマイク。これでガラスの向こう、通常「金魚鉢」にいる人間に指示を出すのだ。

いったい、個人の音楽スタジオにこれだけの機材が必要なのか。

どちらかといえば、ラジオの放送室に近い。ここからなら全国へ軽快な音とおしゃべりを飛ばせそうだ。

「すっごくいい！うちの学校の放送室なんて、これに比べたらオモチャじゃん。本当に使っていいの？」

「いいんじゃないの？別に、好きに使えって言われてるから」

さざりと言って手近な椅子に鞆を置く姿が、また格好いい。さやかはますます彼が気に入った。

「ほんと、凄いよ。写メ送ってみんなに自慢しよ」

さやかは携帯を取り出し、全容が見えるようスタジオを撮った後、メールの送信ボタンを押した。

しかしすぐに首をひねり、それから不満そうな声を上げた。

「なに、これ送信エラーになる！」

たしかに何度やっても送れない。そのうち彼女は原因に気づいた。

「なに、ここ、アンテナが立ってない。圏外じゃん」

「ああ、完全防音だからね。携帯の電波もシャットアウトするようになってるんじゃないかな」



佐伯が慌てるふうもなく答える。

まあいいか、ときやかはパタンと携帯を閉じ、改めていまいるサブ（副調整室）と「金魚鉢」に目をやった。

どことなくおかしい。

うまく言えないが、明るい音楽やお喋りとは対極にある暗い雰囲気  
が、べつとりと張り付いている感じがする。

他に人がいないからそう感じるのだろうか。建物に入るときに感じた  
違和感はまだ消えてはいない。

「なにぼーっとしてるの、夏川さん？ 早く練習始めようよ」

佐伯の声に我に返り、さやかは頷いて鞆から練習用の台本を取り出した。ともかく練習しなきゃ。

「じゃあ、私は課題に目を通しとくから、佐伯くんは機械の準備してて。最初動かすのに調整とかするでしょ？」

そのへんの椅子に腰掛けて台本に目を通そうとしたさやかは、「要らないよ」という声に顔を上げた。

「え？　だって、機材、埃かぶってるし」

「学校のおんぼろコンパネじゃなくて、こいつはプロ用なんだから、電気通せばすぐに使えるさ」

そう言つて佐伯は、慣れた手つきで電源をオンにする。

緑の目玉が光り、惰眠を貪っていた機器に電子の血液が流れ始めた。

制服姿の男子学生は、パネルの反応を見ながら鼻歌交じりにスイッチングを始めた。

その様子を頼もしく見つめていたさやかは、ふとあることに気づいて背筋を凍らせた。

彼はいったい、こんな高価な機材の操作をどこで覚えたのだ？ 高校生が普段から触れるような機械ではない。

視界の端で、何か動く気配がした。

目をやると、一匹のクモがじつとこちらを睨むように、天井近くにへばりついていた。

クモは平気なので悲鳴を上げるようなことはしなかったが、何か気味悪いことが起こる前兆のように思えた。

「入らないの？」

促され、さやかははっとした。こちらを見ている佐伯は、唇の端を歪めて微かに笑みを浮かべている。

さっきまでだったら魅力的と感じただろう。

しかしいまは、なんとなく薄気味悪かった。

一見邪気かなさそうな微笑の下に、黒いものがチラチラ覗いているような……。

「私……帰ろうかな」

作業をしていた佐伯の手が、ぴたりと止まった。

「いま、なにか言った？」

別人のように冷やややかな声だった。

今度ははつきりと、ぞくりとする寒気がさやかな背中を這い上がった。

「あ……えつと……」

「このスタジオ、夏川さんが練習したがつてるところだから、わざわざ知り合いに借りたんだけど？」

「……うん。でも、何かちよつと……怖くて」

「怖い？ 何が？」

「それが分からないの。ただ、なんとなく」

ここで佐伯が鼻で笑っていたら、さやかは席を蹴って帰っていただろう。しかし彼はそうしなかった。哀しそうにこちらを見返したのだ。その目に、少女は少なからずどきりとした。

「せっかく僕が頼み込んで借りたスタジオ、『ただなんとなく』で使わずに帰るんだね？」

「あ……」

好感を抱き始めていた彼にそんなふうに突き放され、さやかは少しシヨックを受けた。



こんな豪華なスタジオに招待されたのだ。たしかに、ろくな理由もなしに帰るのは非常識だろう。

たいていの男が相手なら自分の我を通す彼女も、このときは引き下がった。

「分かった……。じゃ、始めよう、練習」

佐伯はまたにつこりと元の笑顔に戻った。

「そう。じゃあ台本持って、『金魚鉢』の中に入れてくれる？ 僕はこのサブで聞いているから」

「うん。あつちで喋るの、ちゃんとこのサブで拾えるんだよね？」

「大丈夫。こちらのマイクで指示するよ。とりあえずはいっぺん通しでやってみよう」

頷いて、さやかは「金魚鉢」——録音ブースに続く重い扉に手を掛けた。ブチブチと丸い穴が開いている。

むわり、とまた澱んだ空氣に抱きすくめられ、さやかは軽くむせた。ブースに悪意を持って迎えられた気がした。

あまり考えないようにして、広い空間にぽつんと立っているマイクスタンドまで歩いた。

刺さっている黒マイクを軽くハンカチで拭い、スイッチを入れる。

「あー、あー」と声を出してみた。

窓ガラスの向こうで、佐伯が指で丸印を作っている。

『オーケー。ちゃんと聞こえるよ。こっちの声は届いてる?』

ブースの隅に転がっているスピーカーから、彼の声はいくぶん低く増幅されて放たれている。

「ちゃんと聞こえるわ」

『うん、良かった。これでそっちとこっちは、声だけでつながってることになるね』

その言い方に、またもやぞくりと冷たいものを感じた。彼がなんだか、楽しくてたまらないように見える。

考えすぎだ。

さやかは気を取り直し、台本を手に、マイクスタンドの前に立った。

「じゃ、読むわね。最後まで通して読むから、後でイントネーションのおかしいところとかをチェック——」

『その前に、ひとつ君に言っておきたいことがあるんだ』

スピーカーから、表情が消えた声が漏れた。

「え？ え？ なに」

さやかは副調整室を振り向いた。

ガラスの向こうの佐伯は、かすかに笑みを浮かべているように見えた。

『何度も言うけど、このスタジオは完全防音だ。そして忘れられた施設だから、僕ら以外に訪れる人はいない』

じわじわと、さやかの背中を冷たいものが這い上がってくる。まさか。

再びスピーカーの声。

『それがどういうことか、分かる？』

やめて。やめて。

訳の分からない恐怖はもう、臨界点に達しようとしていた。さやかの体がふるふると震えだす。

いったいなにがどうなっているのか分からないけど、これは普通じゃない。彼はどこか変だ。

ガラスの向こうで、佐伯は椅子から立ち上がり、ゆっくりと歩き始めた。

こちらに続く扉へと近づいている。

さやかは脳裏で、なにかのスイッチがピン！と反応した。理屈を越えた生存本能が危険信号を放っている。

彼女は台本を放り出し、ドアへとダッシュした。

ノブに手を掛け、思い切り引っ張った。動かない。

目の前が真っ暗になった。



さやかは尚もガチャガチャと扉を開けようとしたが、重い造りのそれは、女子校生の力ではびくともしない。

何度も何度も試したが、完全密閉を目的としたそれは微動だにすることはなかった。さやかは拳を握り、ドンドンドンと非常な鉄の塊を叩き続けた。

「開けて！ ねえ、ここから出して！」 ドンドンドン。

必死の願いは、虚しく無視され続ける。

なんで。なんでこんなことに。

喉がカラカラに渴いてきた。頭の中はパニックでぐちゃぐちゃになっている。

真っ黒な絶望感で胸がいっぱいになりそうになった頃、再びスピーカーから声が届いた。

『まあ落ち着きなよ、さやかちゃん。どうせ逃げられないんだからさ』

佐伯の声は、学校の放送室で「よかったらスタジオ行く？」と誘ってくれたときとは別人のように変わっていた。

さやかは助けを求めるようにマイクスタンドへ走った。

いまや、彼と、いや外界と唯一つながっているのは、音声マイクだけしかない。

すぐるようにマイクを握った。

副調整室の椅子にふんぞり返る佐伯は、もはや隠しようもない黒い笑いを浮かべていた。

「ちよつとアンタ、どういふつもりよ！ ドア開けなさいよ！」

『そんなに大声出すと、声潰しちゃうよ。女子アナ志望なら喉を大事に  
しなさい。顔だけじゃなく

てき』

スピーカー越しの佐伯の声は、嘲笑を含んでいるように聞こえた。

さやかは押し黙った。

形勢は圧倒的にこっちが不利だ。

だとしたら、ムダに騒がず、相手の出方を見たほうがいい。

わかってはいても、焦りと不安と悔しさでいたたまれなくなってくる。

彼女はマイクを握り締めたまま、ギリツと唇を噛んだ。

佐伯は平気な顔で喋り続けている。

『さっき、こちらから鍵を掛けたんだ。君のところからは絶対に開かないよ』

さーっと血の気が引くような気がした。

閉じ込められた。閉じ込められた。

その言葉がさやか頭の途中でぐるぐると渦巻く。

彼女は再び強くマイクを握り締めた。

「なんで？ どうしてこんなことするの？ 私を閉じ込めてどうしようって言うのよ！』『それを話し合おうよ。これからどうするかを』

ガラス窓の向こうから、佐伯は冷たい視線で見返してきた。

『言っておくけど、僕がここから立ち去ったら、君はアウトだからね』

「……」

『このまま僕がいなくなれば、君は声も音も漏れない、携帯も通じないその空間に、ずっといることになる』

「いや……」

『言つたように、訪ねてくる人はいない。発見されるのは何日後だろうね？ それとも何週間後？』

いやだいやだいやだ。

想像したくない、そんなこと。

『じゃ、ガラス越しに話を始めようか。僕がまだいるうちに』

そう言つて佐伯はにやりと笑つた。





ドンドンドン。

録音用のブース、通称「金魚鉢」の向こうで、さやかが透明な仕切りのガラスを叩き続けている。

髪を振り乱し、盛んに何かを訴えかける必死の形相で。

あいにくマイクの電源が落ちているので、彼女がどんなに叫ぼうがわめこうが、その声は決して漏れてこない。

喉を振り絞って必死に叫んでいるのに、まるで無声映画のように一切の無音状態という光景である。

異様といえ、これほど異様な状況もないだろう。

ガラスの仕切りのこちら側にいる佐伯は、副調整室の椅子にもたれ、半狂乱のさやかを冷ややかに見つめていた。

ムダだと分かっているのに、なお叫ばずにはいられない。

彼女の姿は、まさしく金魚鉢の酸欠状態の金魚を思わせた。

やがて、叫び疲れた彼女ががつくりとうなだれ、はあはあと肩で息をし始めた。

それを見て、悪魔の同級生はようやくマイクに手を伸ばし、二人を結び唯一のコミュニケーションを復活させた。

『そんなに怒鳴り続けてたら声帯痛めちゃうよ？ ダメじゃない、女子アナ志望さん』

サツとさやかが顔を上げた。鬼のような形相だった。

「何考えてるの、あんた。ここから出しなさいよ！」

佐伯は動じるふうもなく答える。

『どう？ 閉じ込められた気分は』

さやかの視線は燃えるようだった。

「こんなことをして、ただで済むと思ってるの？ これがばれたらアンタ、うちの親から殺されるわよ」

『ばれたら、だろう？』

監禁男は涼しい顔で答える。

「何度も言うけど、ここは誰もやってこない廃れたスタジオだ。そして、君と僕がここににいることは誰も知らない」

さやかは青ざめた。

たしかにそうなのだ。本当なら特別に音楽スタジオで練習するのを友達に吹聴してもよかったのに。

この男が「内緒だからね」と囁いたため、二人だけの秘密にしたくて、誰にもメールさえしていない。

もちろん部活の内容に疎い親は、娘が学校にいると思っている。

行方不明になったことが分かって、この男が何食わぬ顔でしらばつくれれば、行き先は決して分らない。

自分とこの佐伯という男が行動を共にしたことなど、誰も知らないのだから。

完璧な拉致監禁。

その言葉を思いついて、さやかはぞつとした。

この男がその気なら、自分は本当に誰からも発見されることなく、この透明な仕切りの奥で衰弱していくだろう。

はあ、はあ、はあ。

さやかは悪態をつくのを止め、眼光で相手を睨みながら、頭の中で作戦を練った。

いまはとにかく消耗を抑え、相手の目的を探るべきだ。そうすれば反撃のチャンスはでてくる。

押し黙ったさやかに、佐伯はガラス仕切りの向こうから面白そうな視線を投げてきた。

『おや、急におとなしくなったね。作戦変更かな？』

「……話し合えないかと思ったのよ」

『ほう、どんなことを？』

さやかは、焼き殺すほどの目つきで男を見据えた。

「あんたがわざわざ危険を犯してこんなことをするのは、絶対それなりの理由があるはずだわ」

『ほほう』

感心したように言って、佐伯はまたふんぞり返る。

殺してやろうか。さやかは思ったが、いまはぐっとこらえた。

「あんたはまともじゃないわ。こんなことをするんだから。でも馬鹿でもないはずよ」

『それはどうも』

「ねえ、なんで私をこんな目に遭わせるわけ？ 私、あんたに何かした？」

意外なことに、また鼻で笑うかと思われた同級生の男は、しばらくの間考え込んだ。



数瞬の後、彼の口は、彼女の予想だになかった単語を吐いた。

『君が何かしたのは、僕にじゃない』

「はあ？」

『君、一年生るときに佐々木っていう男から告白されただろ』

呟く彼の瞳は、ガラスの仕切りを越え、さやか顔さえも貫いて、どこか遠くを見ている。

『覚えてるはずだよ。体育館の脇で君と待ち合わせてるんだって、あいつはうれしそうに話してくれたんだ』

……すぐには思い出せないが、どうやらそのことが、この男の行動の原  
因らしい。

さやかは必死で頭を巡らせた。

思い出した。

あれは一年生の夏休み前のことだった。

同じクラスの男子から、たしかに呼び出されて告白されたのだ。妙におどとした、気弱そうな奴だった。

たいして興味が湧かない男だった。そこで断っておけば良かったのかも  
しれない。

しかしそのとき、さやかの頭を打算が走った。

高校に入って、既に周りは次々と彼氏を作り始めている。自分よりも  
不細工な女子たちがただ、許せない。

もうすぐ夏休みだというのに、自分がまだフリーだというのも我慢ならなかった。

いいわよ、ときやかは、佐々木というひ弱な男子に頷いた。こいつを踏み台にして、いい男をゲットしなきゃ。

ひ弱な佐々木君は優しかった。まるで下僕のように。

何でも買ってくれたし、何でも言うことをきいてくれた。

さやかはその一途な愛情に、すごく分かりやすい態度で応えた。

付き合って一ヶ月後、一緒に海へ出かけたとき、声を掛けてきた大学生についていき、彼を置き去りにしたのだ。

その大学生ともすぐに別れたが、彼の友人たちへと、関係は芋づる式に広がった。

やがて彼女は、学期単位で年上の恋人を替えるようになった。

ドライブ。深夜のお店。そしてセックス。

もはや、ペットのように従順なだけの同級生など、視界の片隅にも入らなかった。

気がつくと、佐々木は学校から消えていた。遠くの町へ転校したという。正直清々したわ、と彼女は思った。

『あれから彼のことなんて、思い出しもしなかっただろう?』

「なによ、家族の都合で転校したからって、それは私のせいじゃないわ」

『家族の都合じゃない』

「え？」

『彼はいたたまれなくなつてここを去つたんだ。君のそばにるのが辛くて』

「そんなの……」

さやかは口ごもった。まさか、いまどきそんなヤワな男がいるなんて。「そんなの関係ないわ。私にふられて勝手にいなくなつたんじゃない。

それに責任持つて言うの？」

ガラス仕切りの向こうにいる男、無言でこちらを見つめている。

椅子にどっかりと身を沈める不遜な態度とは裏腹に、彼の瞳には哀しみの色が浮かんでいた。

『君はね、彼にとって希望だったんだ』

「え?」

『彼は僕の幼馴染でね、ひとつ年下の弟みたいなものだった。小さい頃からずっと一緒に遊んでたんだ』

「……」

さやかはマイクを握ったまま相手を見据えた。

ようやく話が核心に迫ってきた。いまは語らせておこう。突破口になるかもしれない。

『あいつは小さい頃から女の子みたいに優しくてね。ずっと僕を慕ってた。それが僕には心配でね』

彼の瞳は、どこか甘美な思い出に浸るように彷徨った。

『繊細なあいつは、近しい存在に過剰なほどの愛情を注いでしまうその対象が僕であってはいけないんだ』

「……」

『あいつも僕も、別に男が好きなのじゃない』

佐伯は苦笑した。

『彼の場合は特に、女性に奥手だったただけだ。僕はあいつに、素敵な彼女を見つけてほしかった』

そこで責めるような視線がさやかに向けられた。

『素敵な女の子を見つけた、とあいつが恥ずかしそうに言ったときはうれしかったよ。頑張れって励ましたんだ』その瞳が急に残忍なものに変わった。

『……こんな性悪女とは知らずに』

さやかはキツと相手を睨み返した。

「なによ。付き合ってるもの同士が別れるのは当事者の問題じゃないの。なんであんたが恨み節を言うわけ？」

『あいつは本当に純心だったんだ』

佐伯の声には悲痛なものが混じり始めている。



『付き合ってる相手が、見得と物欲の塊で、遊び好きで、男を弄んで捨てる女だなんて、思いもしなかったんだ』

「なによ、私が全部悪いっていうわけ？ そんな女の子、いっぱいいるじゃない！」

たしかにそうだ。季節ごとに衣替えするように、男を取り替える娘は山のようにいる。

なのにどうして私だけ、こんな目に遭わなくちゃいけないの？

『彼は君に、あふれんばかりの愛情を注いでいた』

男の独白は続く。

『君はいとも簡単にそれを踏みにじった。あいつは、無償の愛は報われないと絶望してここから去ったんだ』

だから、それは私のせいじゃないんだってば。

叫びたくなったが、相手は完全に自分の世界に入り込んでいる。何をいっても耳を貸さないだろう。

『あいつは他の学校へ転校した。不運なことに、そこにまたろくでもない連中がいてね。いじめにあったんだ』

「それは……」

『ああ、それは君のせいじゃない。でも、女性に絶望して意気消沈しなければ、おそらく避けられたんだ』

そこで佐伯は目を閉じ、息を吸い込んだ。

『……あいつの自殺は』

バーン、とピアノの鍵盤をひっぱたく音が、さやか of 耳の中で反芻した。

死んだんだ、あの子。

ショックだった。

でもそれよりなにより、ガラスの向こうにいる男は、それを逆恨みして私を陥れようとしている。

『葬儀に出た後、僕は誓ったんだよ。彼に代わって、君に復讐しようってね』

そう語る佐伯の目は、もはや悪魔のそれになっていた。

マイクを握り締めていたさやかの手が、力なくだらりと垂れ下がった。

我知らず、彼女は後ずさっていた。

まずい。この男は本気だ。どうしても私に復讐しなければ気が済まなくなっている。

どうしよう、どうしよう。

なんとか助かる道を考えなければ。ふと、さやかはガラスに映る自分に目をやった。

クラスでも評判のアイドル。同性の女子もうらやむ顔立ちとナイスバディ。

今日は私服で、緑色のワンピースの上に羽織った黄色いカーディガンの胸は、男子ならむしゃぶりつきたくなるほど、豊かに盛り上がっている。

そうよ、あのふんぞりかえってる男を陥落させればいいんだわ。

さやかは意を決すると、再びマイクを握り、佐伯を正面から見据えた。

不意に柔和な顔を作り、瞳に媚の色を浮かべる。

「……ねえ、許してくれない？」

本当は怒りと焦りと恐怖で、はらわたが熱く煮えくり返っている。

それを悟られてはならない。あくまで恭順を装って、あいつを油断させなければ。

そうすれば必ずチャンスはあるはずだ。

さやかはマイクスタンドにもたれかかるような姿勢になり、できるだけ色っぽい声を出した。

「私、彼には悪い彼女だったかもしれないけど、あなた自身は私になんの恨みもないでしょう?」

言いながら、少し後ろに引いた腰をわずかに左右に揺らす。

まるで娼婦みたいだわ。自分でそう思わざるを得ない。

しかし生き残るためには、いまは耐えるしかない。ここを出ればなんだってできるのだ。

私にこんな恥ずかしい行為を強いる、この男に復讐することだって。

佐伯のほうは、明らかに態度が変わった彼女を、それこそ水槽の中にいる珍しい魚でも見るように眺めている。

食いついてきてるわ。確信したさやかは、もっと大胆な行動に出た。

上半身を倒し、椅子に座る彼の目線に近い位置まで視線を下げる。

そのまま服に手を掛け、襟元をくいつと引き下げた。Fカップの豊かな胸の谷間が、くつきりと露わになる。

そこに男の視線が向いた。

さやかはひそかにほくそえんだ。

そう。もっと目を皿のようになして見なさいよ。

あの純情な坊やには、結局最後まで見せてあげなかった、この自慢の白い肌を。決して壊れないガラスの壁を通して、いま静かに男女の心理戦が始まった。

必ずここから脱出してやる。

さやかはそう心に決めた。



